

登校しぶりを長期化させないための校内別室での対応

不登校児童の状況

対象児童は小学校1年生3学期頃から登校しぶりが見られた。保護者と登校し、校門で担任が迎えて教室に入り、そのまま教室で過ごしていた。小学校2年生になり、クラスや担任が変わったが、登校できていた。5月末に運動会が終わった後から教室で度々、声を出して泣き続けることが増えた。3日間、腹痛等を訴え欠席が続いた。その翌週（6月）より、母子分離不安による登校しぶりが再度始まった。毎日保護者と一緒に登校していたが、保護者にしがみついても泣き、離れられない、離れられても、教室に入れない日々が続いていた。

具体的な取組

○安心できる居場所づくり

学校に毎日登校することで自信を付けることができるように保健室登校から始めた。徐々に校内別室指導支援員やSCにつなげていくことで、当該児童が安心して過ごせるようにした。

登校後は、担任や養護教諭と一日の流れを確認することで、不安感の軽減を図った。また、教室で過ごせそうな時間を当該児童が選択できるようにした。

○個別学習の時間の設定

担任と連携することで、校内別室で在籍学級の学習に取り組めるようにした。当該児童の興味・関心のある教材を用意して、自主的に選択できるようにした。

当該児童の希望に沿った活動（折り紙や工作）を支援員と行い、できたという自信や喜びを共感できる時間を設けた。



○学級との関わりの維持

担任から当該児童へ週ごとの時間割を渡し、見通しをもたせた。教科によっては、教室での授業参加を促した。

授業参加する際は、当該児童が安心できるよう、校内別室指導支援員が付き添うことができるようにした。

休み時間に友達が別室に来て一緒に過ごすなど、学級との関わりを図った。

○保護者との連携

学校での出来事を家庭で話すきっかけになるよう、週の時間割に教室で過ごせた時間や内容が分かるように付箋を貼って伝えるように工夫した。

学校や家庭での様子を養護教諭と保護者がノートを用いて連絡し合い、つながることで、当該児童の登校への安心につなげることができた。

成果

当該児童にとって安心できる場所があることで、気持ちが落ち着き、保護者と離れるまでの時間が短くなった。

2学期から、保護者と早めに登校して、教室に入ることで、徐々に保護者が教室に行かなくても教室で過ごすことができるようになった。

課題

学校行事における前向きな努力を評価し、当該児童の自信につなげていく。

進級時に馴染みの教員が変更になった際も、組織全体で一貫した対応を行っていく。